

一心寺かわら版

第八号 平成十八年九月発行

「安齋育郎氏「信心とマインドコントロール」を聞いて」



先日、安齋育郎氏のお話を聞きました。安齋氏は東京大学工学部原子力工学科を卒業した工学博士であり、現在は立命館大学教授などを勤めておられ、原子力、環境、平和など多岐の問題に取り組んでおられると同時に、オカルト・超能力ブームを批判的に考える立場からマスコミに登場し、オウム真理教から攻撃された経歴をお持ちです。朝日新聞の紙上特別講義として、七月三十一日から「平和教育」について連載もされました。

今回は仏教講演会ということで「信心とマインドコントロール」のお話を聞かせていただきました。まず、星座や血液型占いを気にする人々、超常現象番組が高視聴率を取ることからわかるように、世の中オカルトだらけであるとおっしゃいます。

ですが、それらにはきちんとした根拠がない。人間というのは何か悪いことがあったとき、運勢が悪かったであれ、霊の仕業であれ、不幸を何かのせいによって精神的安定を求める傾向があるといえます。それで納得しているだけならまだいいのですが、ついには、私の運勢は良くなるのだろうか、運勢を良く

するにはどうすれば、悪い霊を払うには、などということに束縛されていくでしょう。それが悲劇を生んでいきます。

その実例として、ある占い師に「あんたみたいな馬鹿・・・」と罵倒され、運勢をあげるために千数百万の墓石を買わされ後悔した人、自分は馬鹿と思いつみ込みショックを受けて、それを振り払うことができなくて自殺した少女の話が聞かれました。

本来占いとは、会話の中から相手の望みを読み取り、それを答えとして与えるものだといえます。つまり相手の心の整理のために話しを聞いてあげ、なんらかに託して力添えをする役割であるはずなのに、現在はそうはなっていないと批判されます。

ではなぜ人は占いに翻弄されるのでしょうか。占いを当てるにはさまざまな方法があるといえます。占う相手の下調べをしておく、相手との会話の中からそれとなく情報を聞き出すなどして、さもあなたのことを分かっていたように装うテクニク。適当なことを言い、当たったならば「そうでしょう」、はずれたら「良かったですね」と会話を進めるテクニクなどがあるそうです。具体的には、「あなたの家にフランス人形があるでしょう」と聞き、「ある」と言ったら「そうでしょう。私にはすべてお見通し・・・」と驚かせ、「ない」と答えたら「あつなくてよかった。あつたらとんでもないことになることだった・・・」と続ける。

また、占い師の言葉に対して、そういえばこれは占い師が言っていたことでは、と後からの意味づけがおこる「そういえば効果」が起こり、ついつい当たっていると思いついてしまうそうです。

さらに占いは、当たったことだけが心に残ることが多いそうです。実際にだましのテクニクとして、安齋氏得意のスプーン曲げや予知マジックも披露して下さいました。紙面では伝え切れませんが、なるほど、私たちは騙されやすいと納得させられました。このように色々な方法で私たちは騙される、マインドコントロールされていくのだそうです。

では人はなぜ騙されるのか、それは「思い込み」と「欲得ずく」のためだと言います。安齋氏は「人をその気にさせる方法には、基本的に二つの異なる方法がある。一つは、身に迫り来る恐怖を突きつけ「このままでは大変なことになる」と思わせた上で、それを回避する妙手を提示することである。二つ目は、非常に魅力的な宝物（金でも異性でも健康でも幸福でも生きがいでも、何でもいい）を吹聴し、それを手にし得る妙手を提示することである。だが、世の中、「思い込み」と「欲得ずく」の生き方ほど危ないものはない。」（著書『騙される人騙されない人』）と言います。ある詐欺師は「人びとに欲望がある限り、私らは困りません」と語ったそうです。

親鸞聖人は「かなしきかなや道俗の 良時・吉日えらばしめ 天神・地祇をあがめつつ ト占祭祀つとめとす」『愚禿悲歎述懐和讃』と、根拠のない日時の良し悪し、占い祭祀によって行動することは、自らにいわれのない束縛を課す悲しいことであるとおっしゃいます。

先生はそれを防ぐ手立てとして、ものごとを自分の目で見、自分の頭で考えて、科学性を踏まえて主体的に生きようとおっしゃいます。その通りでしょうが、仏教ではさらにもう一つ先に踏み込みます。なぜなら、「私」という存在がもともと煩惱にとらわれて迷っていると考えるからです。そこに仏の教えがはたらくのです。

仏教、浄土真宗が何を説いているのかと聞かれたら私は、「真実のいのちのあり方と行き先を教えるもの」と答えます。私といういのちは無数の縁によって成り立っているもの、はかりしれないいのちに包まれているものであるということに目覚めたならば、根拠のない迷信や思い込み、欲得にとらわれるよりも、いのちの不思議に感謝し、一日一日すべてのいのちを慈しみつつ浄土の道を歩んで行くことが大切になるでしょう。もし惑わされそうになっても、阿弥陀仏や諸仏が私を護って下さっているとお念仏を称え、仏さまの声に耳を傾け、それを宗（むね）として安心して生きていくことができるのではないのでしょうか。

眞宗仏事について⑤迷信

①友引 その日に葬儀をすると友を引く、死者がこの世の人を引っぱり、さらに死人が出るというそうです。しかし「友引」とは六曜の一つで、もとは「共引」と書いたともいわれ、ともに引き合って勝負がつかないことをあらわしているそうです。ですからただの文字の連想であり、気にする必要はありません。

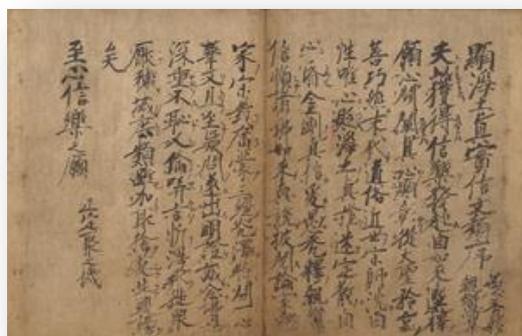
② 清め塩 これは死を穢れと見ているのでしようが、仏さまに失礼にならないでしょうか。仏式の葬儀には不要なことです。

③ 出棺時の茶碗割り これは故人が帰ってこないように（迷わないように）という意味合いで行われているようです。真宗は「南無阿弥陀仏」によって浄土に往生され仏さまとなられ、私を救うために自在に働いて下さるといふ教えですから必要ありません。

④ 四十九日が三ヶ月に？ これは始終苦（しじゅうく、四十九）が身付き（みつき、三月）になることを嫌ってのことだそうです。これも語呂合わせの迷信そのものでしょう。

⑤ 弔電・お悔やみ 「天国」という言葉は仏教では迷いの世界であり、真宗門徒は「浄土」に往生されるわけですから、間違えないようにしたいものです。また亡くなられた方に対して、「冥福を祈る」（冥土＝暗闇での幸せを祈るといふ意味になる）ことは浄土に往生されていないと考えていることになります。例えば「浄土に往生され私をお導き下さる仏さまとなられた〇〇様（さん）を偲びつつ、お念仏申し上げます」などとされてはどうでしょうか。

他にもたくさんありますが、仏さまを讃え偲び、そのみ心をいただくのが法事です。真宗は「門徒もの知らず」といわれたようですが、これは本来「物忌（ものい）み知らず」（たたりや日の良し悪しなど、いわれのないことに迷わない）ということなのです。ひとえに阿弥陀仏に手を合わせてきたから真宗は一向宗と呼ばれてきたのです。凡夫である私の都合ではなく、仏さまの声を第一に考え、正しい教えによって物忌みしないように心掛けましょう。



お経ってなあに？⑤『正信偈』

親鸞聖人の著した『教行信証』、正式には『願浄土真実教行証文類』（けんじょうどうしんじつきょうぎょうしゅうもんるい）にある百二十句の偈で、五百年以上もの昔から唱えられてきました。阿弥陀仏は悩み苦しむものを救うべく浄土を建立し、往生させることによって救い取ろうとされ、その願いを本願念仏「南無阿弥陀仏」に込められました。その本願のいわれを聞き信じることによって往生が定まり、そして、阿弥陀仏と同じくかぎりないのちの仏となつて、迷いの世界にいる人々を導くといわれます。親鸞聖人は、かぎりないのち、はかりしれないひかりである阿弥陀仏に帰依することを宣言され、お念仏によって救われて力強く人生を歩まれたことをあらわされたのです。

その本願念仏のみ教えをお示し下さったお釈迦さまや七人の高僧、インドの龍樹（りゅうじゆ）菩薩・天親（てんじん）菩薩、中国の曇鸞（どんらん）大師・道綽（どうしゃく）禪師・善導（ぜんどう）大師、日本の源信（げんしん）和尚・源空（げんくう）上人のみ徳を讃え、私たちにそのみ教えを聞くお念仏の生活を勧められています。